風土記

〈高知県立歴史民俗資料館〉 第5号 1992年10月1日

海人と山民の文化的伝統

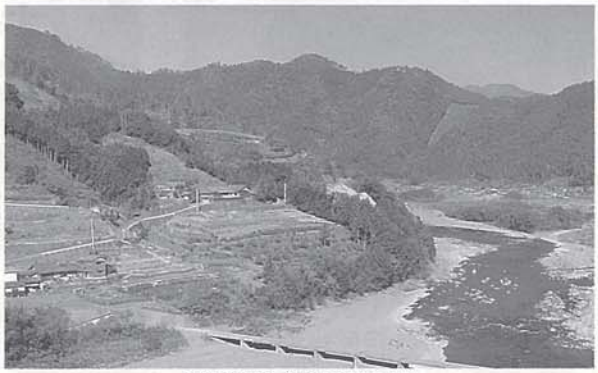
高知大学助教授　吉成直樹

海と山というふたつの対極をなす自然にかかわる文化的伝統が、さまざまな点で共通性を持つことは、これまでもしばしば指摘されてきたことであった。

たとえば、海と山を舞台とする生業である「漁」と「猟」がともに「リョウ」と発音されることは端的に両者のつながりを示しているし、また漁師には沖言葉があり、猟師には山言葉があるという共通点がある。さらに、漁師、猟師ともに一般に女性にかかわることがら、ことにその不浄を嫌うこと、ハエやソネなど地形を表現する地名のなかに、海と山で共通のものが多くみられることなども、そうした類似点のうちのひとつにあげることができるだろう。このような平地の社会をはさんだ共通性が一体何に由来するのかいまだに明らかになっていないが、しかし同一の文化的基盤を共有していたと考えない限り、説明することはできないのではないだろうか。

＊　＊　＊

一般に山地の人々の生活は、身のまわりの仕事だけで生活が成り立つナロウ・スペクトラムの平地農民とは違い、広い範囲を移動し、さまざまな技術＝職を持つことによって生活の糧を幅広くかき集めることから成り立つブロード・スペクトラムの生活であった。山地を生活の舞台とする人々のなかには猟師のほかに、木地師、杣、鉱業や宗教・芸能で生活する一群の人々などもいた。たとえ、山地で焼畑農耕に従事する人々であったとしても事情は同じであり、夏は農耕に従事し、冬は山仕事や出稼ぎ、行商、芸能など、夏とは違った場所に移動して生活する場合が少なくなかった。出作り小屋を次々に移してゆく永久出作りの形態をとる場合もあった（山民の特性の詳細については、千葉徳爾氏「山の住民の特性について」「山村の類型と変遷についての覚え書」などの諸論考を参照されたい）。



土佐の山村（四万十川上流）

このような山地の人々は、広い範囲を移動して歩くだけに、世間の噂や情報に通じており、平地社会の動きにすばやく対応する変わり身の速さがあった。たとえば、九州・椎葉山では長崎・平戸にタバコが伝わってから20年後にはすでに栽培していたというし、高知県大豊町のある集落で聞いた話では、昭和初期に自家発電機をいち早く導入して人々を驚かせたのは明治期に定着したサンカの家であったという。ブロード・スペクトラムの生活に裏打ちされた、山民の持つ情報収集の能力や進取の気性―山民の特性はそればかりではないが―を考えれば、現在の大商社の源流が、ごうした人々のなかから出てくることになったのはきわめて当然のことであろう。見方をかえれば、現代の日本の都市文化のあり方を規定しているのは、水田稲作民的な伝統が強調されながらも、実は山民の持って

いた文化的伝統そのものであるように思えてくる。水田稲作を基礎とする農業があらゆる面で不当に低く評価されていることも、以上のことに関係があると言えば、無知にすぎるであろうか。文脈は異なるが、第二次世界大戦前に、柳田国男は、修験者や山伏に山民の性格が顕著にみられると考え、「この山民の性格は平地社会に入りまじって姿をかくしたようにみえる。しかしまだ形をかえて世の中をかきみださずにはおかないのではあるまいか」（「山立と山臥」）と述べているのも、いかに山民の文化的伝統が根深く、影響力の強いものであるかを指摘しているようで興味深い。

＊　＊　＊

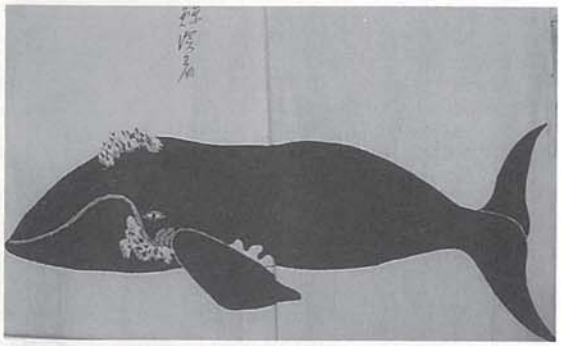
さきに述べたように、海人と山民の間には多くの類似点がみられる。すでに消滅したかにみえる山民の文化的伝統が、依然として現在の都市文化のなかで生命を保ち、深層で人々を突き動かしているように思われるのに対し、一方の海人の文化的伝統は、一体どのようなかたちで都市文化のなかに生き続けているのだろうか。国土のまわりを海で囲まれ、国家の成立以前から重要な役割を果たしていた海人の文化的伝統が、山民のそれに比べていまひとつ鮮明なかたちで見えてこないように思われるのである。

とる鯨　いかす鯨

企画展「鯨の郷　土佐―くじらをめぐる文化史―」から

中村淳子

土佐において、かつては重要な生業のひとつであった捕鯨―その捕鯨の歴史と文化を紹介する企画展「鯨の郷　土佐―くじらをめぐる文化史―」を、一〇月一〇日（土・祝日）から一一月一五日（日）まで当館で開催する。『和名類聚抄』（承平年間　九三一～九八三年成立）には、県西南部に、「鯨野郷」という古代の郷の名がみえる。この名は、土佐湾に古来から鯨が回遊してきたことを物語っている。



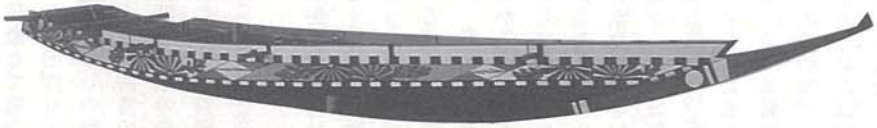
セミクジラの図　（窪津漁業協同組合蔵）
『窪津捕鯨文書』より

大　杯　（多田公子氏蔵）
鯨組では、乗り初めや船降ろしのときなど、さまざまな酒宴が催された。

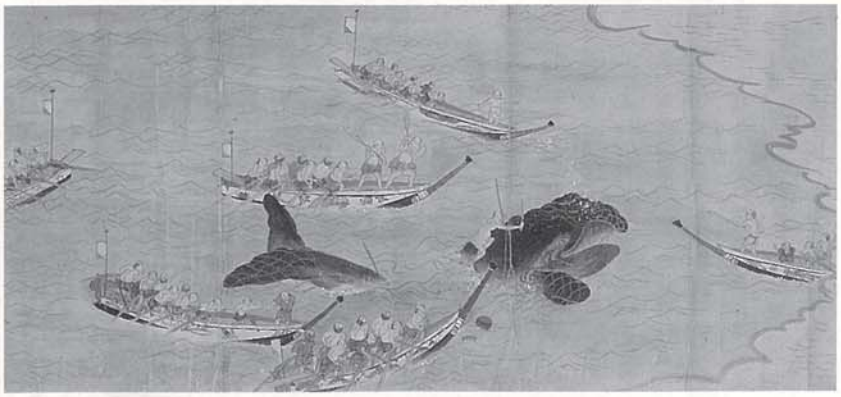
人間と鯨との関わりは、捕鯨技術や鯨体利用をはじめとする、さまざまな文化を生み出してきた。

漁の対象としての鯨、すなわち「とる鯨」については、今回の展示の中心となる網取り法の話を、実際に従事していた人から聞くことは既に不可能であった。「山見（鯨を発見する役目）のじいさんが言いよった。」という、又聞きの話が聞かれるばかりである。というのも、明治三九年（一九〇六）に、土佐では網取り法による捕鯨は終わり、その後すぐに、ノルウェー式捕鯨砲を使った近代捕鯨にかわったからである。

しかし、土佐の捕鯨については、伊豆浅吉氏の『土佐捕鯨史』や、吉岡高



勢子船模型　（室戸小学校蔵）
網取り法の鯨船には、鯨の行く手に網をおろす網船と捕獲した鯨を浜へ運ぶ持双船、鯨を網へ追い立てたり、網船や持双船を曳く勢子船の三種がある。



土佐捕鯨図会
（高知県立図書館蔵）
捕鯨の各場面が描かれた絵巻である。この場面は、輸送用の縄を通す切れ目を羽指が鯨の背に入れているところで、これを「手形を切る」という。

吉氏の『土佐浮津組捕鯨實録』、桂井和雄氏の『土佐津呂組捕鯨聞書き』や山田實氏の『津呂捕鯨誌』など、研究成果が文献にまとめられており、その中には、網取り法を行なっていた当事者から聞き書きしたものもあって、かつての様子を生き生きと伝えている。

土佐の捕鯨は、他所から技を学ぶことで発展してきた。網取り法は、天和三年（一六八三）に紀州（和歌山県）太地から伝えられたもので、その後も、寛政一一年（一七九九）に、九州の捕鯨を視察にいくなど、他所の技術を積極的に調査し、取り入れている。

網取り法を行なったのは、大規模な捕鯨の技術者集団、鯨組で、土佐では、室戸の津呂と浮津に鯨組があった。鯨組は、経営者を頂点とする、役割分担や序列が明確な組織である。その構成員は、それぞれの指揮者の指示にしたがって仕事をした。例えば鯨と死闘を演じる水夫たちは、総指揮者である一番沖配や、各船の指揮者である羽指（はぎし）にしたがって活動した。山見や魚切り（鯨の解体技術者）の指揮者のことは親父といった。

魚切りの技術によって無駄なく解体された鯨は、肉や油などあますところなく活用された。まさしく「いかす鯨」であり、これは、近代捕鯨にも受け継がれた日本の捕鯨文化の特色である。鯨の油は灯火の他、稲の害虫駆除にも用いられた。鯨ひげは、からくり人形のゼンマイとして利用され、鯨の筋で作った熨斗（のし）が儀礼に用いられるなど、鯨の体の利用方法は多岐に渡っていた。

「いかす鯨」の代表格である「食べる鯨」については、無塩（ぶえん）の鯨（取れたての新鮮な鯨のこと）を刺し身で食べたり、「へら焼き」といって、厚い鉄鍋で、たたきのように表面だけを焼いたり、塩と糖の中につけておいた黒皮を、煮物のだしにするなど、さまざまな調理法が伝えられている。特別な日に儀礼的に鯨を食べることもあった。すなわち「大晦日の晩には、大きいものを食べる」といい、鯨を食べる習俗である。この習俗は、県中央部の平野部や、山間部などではよく聞かれ、県東部や県西部などでは聞くことができないなどの地域性があるようだ。

鯨の消費地は地元の土佐だけではなく、鯨商人が市艇（いちばい）で運んで大阪などで売った。捕鯨は、鯨食の盛んな大都市の発展や、農村の鯨油の需要などを背景として発展していったのである。

国際捕鯨委員会（ＩＷＣ）が、昭和五七年（一九八二）に商業捕鯨の全面禁止を決定してから、豊かな捕鯨文化は失われつつある。その一方では、室戸市では勢子船を復原して鯨舟レースを行ない、土佐沖では「みる鯨」、すなわちホエールウォッチングが盛んに行なわれるなど、方向転換を図った「いかす鯨」もあらわれている。

鯨商人札　（多田公子氏蔵）
鯨商人の身分を証明する札。

茶運人形
鯨のひげをゼンマイとして用いている。

═企画展示資料から═

室戸市中道寺の鯨供養位牌

室戸市浮津の日蓮宗の寺、宮地山中道寺に江戸時代の三基の鯨の位牌がある。この寺は、香美郡（南国市）田村桂昌寺（現細勝寺）の脇坊で、元禄十五年（一七〇二）に宮地武右衛門の帰依により、田村から室戸に移転再建された寺と言われている。

位牌は、死者の俗名や戒名を書いて仏壇などにまつる仏具の一つであるが、この鯨の位牌は、鯨の供養のために造立されたものである。では、なぜ鯨の位牌が造られ供養されたのだろう。

実は、鯨の供養の為に造られたのは、位牌だけではなく、供養塔や位牌の銘文にみられるように梵鐘も造られている。

この中道寺は、宮地武右衛門の帰依により、室戸浮津組宮地家の菩提寺として栄えた。宮地家は、天保八年（一八三七）に鯨の捕獲数が千頭になったので梵鐘を寄進、天保十一年には法華経五十部を読誦し、鯨の位牌を造り供養したのである。

天保十一年の紀年銘のある位牌(1)は、高さ一〇六・八センチで表面には、

「南無釈迦牟尼佛　有情非情法界平等
南無妙法蓮華経　鯨魚供養
南無日蓮大菩薩　一乗法雨卒土十洽」

裏面には、

「宮地捕鯨自寛政庚申至天保丁酉凡及／一千因為其鑄鐘寄附中道寺猶託余讀誦妙／經五十部以設供養仰願鯨鯢速脱患苦疾證／得菩提及至法界利益無窮／天保十一年庚子二月涅槃忌神力山日凝稽首欽言」

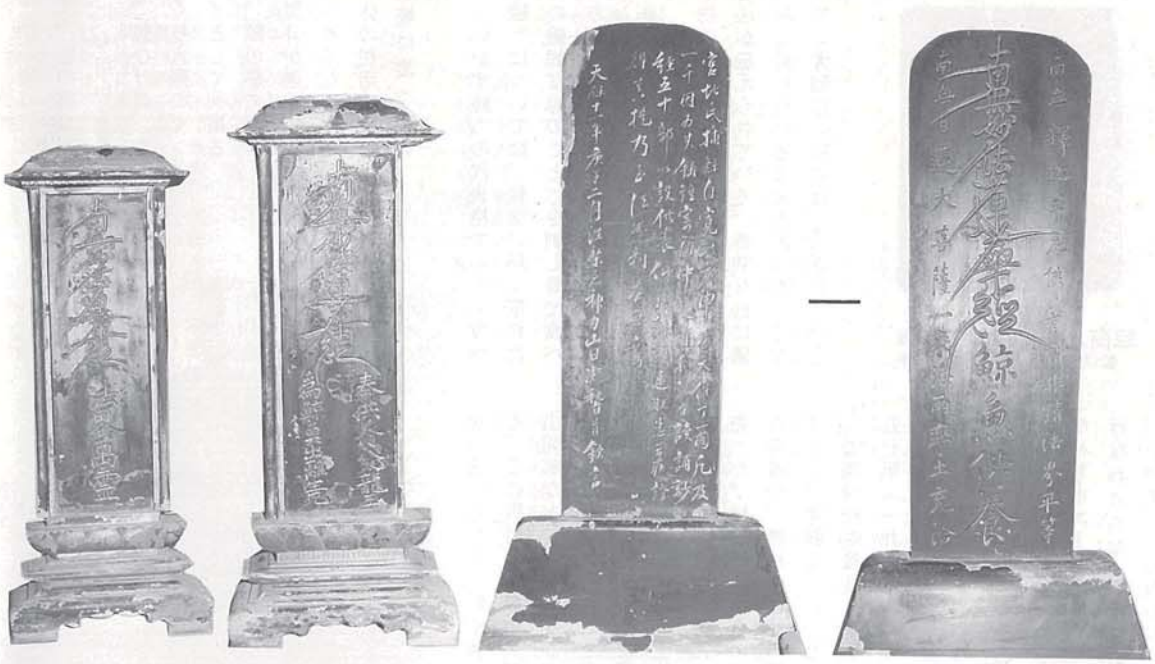
とある。もう一基の位牌(2)には、

「奉供養八大龍王
南無妙法蓮華経　為鯨出離生死」

とある。さらにもう一基の位牌は、鯨を含む、仏の及ぶ世界のすべての霊に対して造立されたものである。位牌(3)の表には、「南無妙法蓮華経　法界萬霊」

とある。これらの位牌の造立を見る限り、浮津組が如何に生業活動としての捕鯨に依存していたかがわかる。そして、当時の漁民が鯨の供養を行なうということは、自らの生業活動を支える鯨に対しての配慮があったからであろう。それは、畏怖や畏敬の念から生まれたものであろう。

（岡本桂典）



(3) 界万霊位牌　(2) 鯨供養位牌　同右裏面　(1) 天保11年銘鯨供養位牌

═ 史料紹介 ═

城下町家扣(一)

吉村　淑甫

「城下町家扣」について

本表は明治の民権運動家・安芸喜代香翁の旧蔵で、現在高知市民図書館の「安芸愛山文庫」中に入っている。安芸喜代香は民権運動につづいて土佐における大正デモクラシーを推進する活動にも従った。また江戸の民間学（石田梅巌）の「心学」についての研究にも熱心であったので、この資料も民間研究の一端として蒐集されたものと思われる。

「城下町家扣」は城下廓中外の書出しとして作製されたものであろう。この後に別に「新町地検帳」が付されているが、後記に「右地検帳従先規有之」とあって、新町庄屋・仁助の名が記される。町屋扣も恐らくこの仁助の手になるものであろう。

新町の各一軒当りの規模と姓氏名が記されており、幕末期の士庶民名簿としても興味深い。

＊屋号及び職業名は小活字とした。姓氏名の分は士分と考えてよい。なお文末に若干の註記をほどこすこととした。

城下町家扣

嘉永七年寅年一二月

北片側分

（表口）　（裏行）

北表　五間　五間　池内　仲次　東表　四間　四間　三間　三間　北表　四間　三間　弐尺　五間五尺五寸　右同人

〃　四間　拾五間　伊東　直七　〃　三間　四間　三間　〃　魚賣　傳右衛門

〃　五間四尺二寸　拾四間二尺　岡村甚三郎　〃　四間　四間　下代類　傳次郎

〃　四間三尺七寸　拾四間　田中　周丞　〃　三間　四間　酒井屋

〃　三間　拾二間五尺二寸　野口喜三八　〃　八間半　四間　酒井屋　紀伊国屋　亀吉

西表角　弐間半　四間　伊野屋　茂助　〃　三間半　四間　〃　永野　種次

西表　弐間弐尺　四間　田村屋　久万太郎　南表　弐間　八間　大工　隆吾

〃　三間壱尺壱寸五分四間　馬方　傳次　〃　弐間　八間　大工　善四郎

〃　四間四尺五寸　四間三尺　土方鎌吾郎　北表　五間　九間半　虎屋　三良平

東表　拾三間半　五間　油屋　直助

〃　拾間　五間　池上平左ヱ門

笹村栄次郎

井手端西側分

（表口）　（裏行）

北表　五間弐尺弐寸　拾四間　中川　庄平　年季夫　寅助

〃　四間三尺三寸　七間　横山　名蔵

東表角　七間　六間壱尺　田中重次郎

東表　七間　拾間四尺三寸　川崎　半平

東表　弐拾間　拾六間　鎌田義之助

北表　拾六間　七間　岡田

東表　四間　拾六間　久保長太良

〃　五間　拾六間　寺田　新助

〃　四間　拾六間　松木嘉平太

〃　四間壱尺六寸参歩拾六間　勝賀瀬小八郎

〃　三間半　八間　藤　勇作

右藤勇作裏続二有

東西　八間　南北　東二而三時半　西二而九尺　久屋　廣助

南表　表口弐間四尺　裏行五間五尺五寸　右同人

但享和二戌年辻番所引受を以家床二被指

明御町作式ニ相成御貢物米立諸役被許之

（註記）

「北片側分」は鉄砲町に当たる。鉄砲町は寛永年代（一六二四～四三）に新町が出来た頃から片側町として出発した。すなわち藩が鉄砲足軽を此処に居住せしめ、傍ら堤防護衛に当たらせたと云われているが、元禄十一年この足軽組は農人町に移された。しかし嘉永頃もなお鉄砲町としてのこり、昭和時代へまでつづいた。

北片側に九軒が並んでいる。うち二軒は商家で、馬方が一人いた。「井手端西側分」は菜園場の堀割に添うた場所で、此処には廿六軒が並んでいる。うち商家八、職人二。

本棚

『本川村史 第二巻 社寺・信仰編』

本川村史続刊編集委員会編

本書は平成元年に刊行された。はじめて本書を手にした日の興奮を思い出す。ページをめくる手ももどかしく、次々に関心のあるところを読んでいった。これほどエキサイトしながら本を見ることはこの二、三年でほかに無い。

タイトル通りこの本は、本川村の神社仏閣を余さず収録したものである。その調査データは精緻をきわめる。仏像や社宝は可能な限り写真を掲載し、棟札は全文活字化されている。徹底した調査で、編集委員会の苦労がしのばれる。

だが、ここまでなら、この本は一級の資料集というところにとどまる。本書の本領は、その解説部分において最大限に発揮される。現在まつられている神仏が、一体どのような神仏であるのか、一体どのような人たちによってまつられてきたのかを、周辺資料を駆使して読み解いていくのだ。

神仏の性格については、太夫の家筋に伝えられてきた祈禱文書の数々が参照される。一般的な説明ですますのではなく、地元の人たちがどのように考えてきたかを、土着の資料によって解明していく。かくして、山の神、鍛冶天神、山姥、弘法大師などが、地域色豊かな姿をあらわす。聞き書のみでなく祈禱文書をふまえることで、この部分はかつてない厚みのある宗教民俗誌になっている。

そして、神仏のまつりを支えてきた本川村の人々の歴史を、棟札、系図、伝説を総合して復元していく。はるばる本州から氏仏を背負って移住してきた一族、神社の祭祀をめぐる争い、一族の発展にともなって勧請されていく神。系図や伝説がどれだけ真実を伝えているかは問題だが、それらはただの嘘誤りなのではなく、より深い「歴史」を含んでいる。本書のなかで想像の歴史と真実の歴史はあやうく交錯しながら慎重に分けられており、不用意に伝説と史実を混合しているのではない。そして、両者の向こうにより大きな歴史を感じることができる。主執筆・高木啓夫氏の力量が遺憾なく発揮された民俗誌（史）の傑作である。

（梅野光興）

歴史散歩

土佐神社

〈高知市一宮〉

第五回

支那禰さまとして地元では親しまれ、味耜高彦根命あるいは一言主神を祀る。雄略天皇四（四六〇）年の鎮座と伝えられる。『日本書記』には「土左大神」、『土佐国風土記』では、「土佐高賀茂大社」、『延喜式』には土佐郡五座のうちのひとつ「都佐坐神社」と記されている。

国道三二号線からすぐに楼門が見え、杉木立の長い参道を進み、鳥居を抜けると土佐一の宮らしい堂々とした社殿が見えてくる。

古い文献に土佐神社の名が見えることから、長い歴史を経て今日にいたっていることが分かるのだが、本殿、幣殿、拝殿の現在の建物自体は永禄六（一五六三）年に本山梅渓が長宗我部氏の本拠地、岡豊城を襲撃した折りに一宮村を焼き討ちにした時焼失し、その後、長宗我部元親によって再建されたものである。幣殿、拝殿をトンボの胴、翼拝殿をトンボの羽とみるとトンボが本殿に飛び込むような形に見える。これに対し、出トンボの形式は高知市長浜の若宮八幡宮に見られる。元親が浦戸城から出陣の際は若宮八幡宮に戦勝を祈願し、土佐神社には凱旋を報告した。これらの社殿に向かって右手に慶安二（一六四九）年に土佐藩二代目藩主山内忠義によって再建された鼓楼がある。屋根が大きく一見不安定な造りのようであるが、袴腰をつけ、優美な曲線を描いている。以上の建造物は、いずれも国の重要文化財に指定されている。

長い歴史のなかで焼失などの被害を受けながらも、多くの社宝が現存する。高知市の有形文化財の指定になっているものに能面五十一面、鰐口一、銅鏡四十二面がある。

（曽我満子）

土佐神社

ニュース

～企画展示室から～
「第二回　寺田寅彦展」

昨年の開館記念特別展「第一回　寺田寅彦展」に続いて開催。第一回が寅彦の文学、芸術を概観したのに対し、今回は、物理学者としての寺田寅彦を紹介する企画となった。

寺田寅彦が研究対象としたテーマは幅広く、その成果は『寺田寅彦全集』科学篇に収められている。その中から「自然界の縞模様に関する研究」、「火災の研究」、「地辷りに関する研究」を中心に論文の手書き原稿、タイプ原稿、実験写真、図を、また高知の風景を描いた水彩画、弟子の篠崎長之とのやりとりがうかがえる書簡類、他の弟子たちからの実験レポートが紹介された。中でも「自然界の縞模様」のコーナーの猫の毛皮の模様図とコンクリートの割れ目の研究は一見、別の現象でなんの関わりもないように思われるが、この二つ、そして諸々の現象から自然界の模様に関する法則に気付き、論文を完成し、その課程がたどれる展示ともなった。

「自然界の縞模様に関する研究」のコーナー

理化学に特に興味を持っている人でないとなかなか馴じみにくいとの意見もあり、展示指導をして頂いた高知大学、高知医科大学名誉教授の上田壽先生による展示解説の音声テープを展示室におき、自由に聴けるようにした。

また、寅彦が熊本第五高等学校在学中に出会った夏目漱石からの親しみをこめた書簡が人々の興味をひいていた。

〈「れきみんサークル」〉
第一回　史跡巡り

平成四年度第一回の史跡巡りは「嶺北地方の史跡と文化」と題するバスツアーを行い、講師に広谷喜十郎氏をお迎えして、深緑の嶺北路を訪れた。

午前中は国宝・豊楽寺薬師堂などを見学ののち、立川靖浩氏による軽妙で心なごむお話もうかがった。

午後には野中兼山ゆかりの帰全山や大原富枝文学館なども巡り、吉野川の清流と豊かな文化の香りに心洗われる一日を終えることができた。

〔歴民館日録〕

月日	出来事
六月六日	第一回史跡巡り「嶺北地方の史跡と文化」
七月四日	三階企画コーナー「土佐の考古学の先駆者－松浦佐用彦と寺石正路－」開始
七月一八日	企画展「第二回　寺田寅彦展－科学とその周辺－」開幕
八月二日	常陸宮両殿下ご来館
八月四日～九月八日	博物館実習四回
八月五日	夏休み子ども教室（南国市と合同企画）
八月三〇日	企画展閉幕

ユア・ボイス

○企画展
「第二回　寺田寅彦展」について

夏目漱石の直筆の手紙や、寺田寅彦の絵など、とてもよかった。

目の付けどころが違うのが、常人と異なっていて良い。

郷土出身者の企画は良い。地味な企画だけに展示にもう少しアクセントをつけるような工夫が欲しい。

子供にとっては硬い内容なので少し、無理があったが、大人にとっては、漱石との交流の様子が書面からうかがえて興味深かった。

私は夏休みの宿題で寺田寅彦を調べるのでここに来ました。またこの企画をやってほしいです。

○その他について

何か学習会を開くなどして小中高校生を呼んでみては。

2Fは地元の人でも知らないことも展示してあり、面白かった。3Fは江戸末期の高知城下の模型等分かりやすい。

灰皿をおいてください。

見学者も利用できるような図書室など、県の歴史民俗研究のセンター的役割を持つことを希望します。

弥生時代の人の足型があって、それに足をあわせてみると全然違ったのでびっくりした。

――今回は八月にアンケートを実施しましたので、県内一般のお客様に比べて県外の方や小学生からたくさんご意見を頂きました。灰皿については館内禁煙となっておりますので館の外に2箇所喫煙所を設けております。――

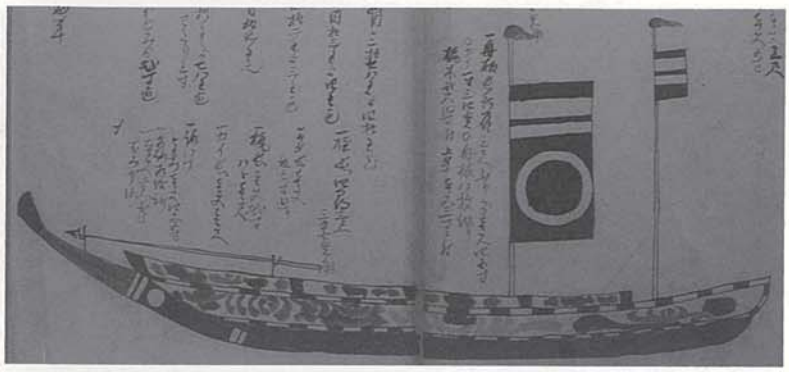
〔企画展の案内〕

鯨の郷　土佐
―くじらをめぐる文化史―

平成四年一〇月一〇日（土・祝日）より一一月一五日（日）まで、一階企画展示室にて開催します。

藩制時代から明治にかけて行なわれた網取り法を中心に、土佐の捕鯨の歴史と文化を紹介する企画展です。鯨との命をかけた闘いが生き生きと描かれた捕鯨絵巻や、深い信仰の世界を物語る鯨位牌、鯨組の暮らしをしのばせる鯨杯などのさまざまな資料によって、土佐の鯨文化をたどります。あわせて和歌山県や佐賀県などの資料も紹介します。ぜひご観覧下さい。

入館料は、大人四〇〇円、中高生一五〇円、小学生五〇円（常設展込み）です。



勢子船の図　（窪津漁業協同組合蔵）　『窪津捕鯨文書』より

講演会

関連企画として、土佐の鯨文化や捕鯨史を長年追及されている、広谷喜十郎氏と島村泰吉氏の両氏による講演会を、左記の日程で行ないます。ぜひご聴講ください。

日時　一〇月二四日㈯
　　午後1時30分～午後4時

「黒潮と土佐の鯨文化のきずなを求めて」

当館運営審議会委員　広谷喜十郎氏

「土佐の捕鯨史」

土佐史談会評議員　島村泰吉氏

講演会は入場無料で定員80名です。参加希望の方は一週間前までに、住所氏名電話番号をご記入の上、葉書にてお申し込み下さい。

〈利用案内〉

開館時間　午前9時～午後5時
（入館は、午後4時30分まで）

休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）／12月28日～1月4日

入館料　一般・400円／中高校生・150円／小学生・50円
［常設展示］
団体（20人以上）割引きあり
（療育手帳・身体障害者〈1・2級〉手帳所持者とその介護者〈1名〉長寿手帳所持者は無料）

交通機関

高知市中心部から車で約20分。

駐車場（大型バス4台・普通車50台）あり。

バスを利用する場合は次のとおり。

［県交通］船岡南団地発歴民館行き終点下車。
領石・奈路・田井方面行き学校分岐（歴民館前）下車。
（徒歩5～10分で資料館へ）

［土　電］新改・白木谷方面行き岡豊橋下車。
（徒歩10～15分で資料館へ）

〈図録販売中〉

○「仮面の神々―土佐の民俗仮面展―」展示解説図録　頒価千円送料一冊二六〇円

展示資料を中心とした三五〇点の仮面の写真に詳細な解説を付す。

○「常設展示案内図録」

頒価千五百円送料一冊二六〇円

オールカラーで、総合展示室と民俗展示室の代表的な資料を紹介する。

〈ひとこと〉

寺田寅彦展を開催して多くの寅彦ファンがいらっしゃることを知り、改めて寺田博士の魅力、偉大さを痛感しました。（曽我）

「夏休み子ども教室」では南国市内の子ども達が元気に原始時代を〝体験〟していました。「火おこし」に頑張って頂いた先生方、誠に御苦労様でした。（下村）

鯨供養の位牌は高さ一メートルほどあります。その大きさにびっくり、それだけ人々の想いが込められているのでしょう。（岡本）

平成四年一〇月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783 南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　0888－62－2211
FAX　0888－62－2110